

高山 成子

広島県立保健福祉大学 教授

通所系サービス利用効果および利用中断に関する研究

通所サービスの利用を開始した 85 名を対象に、追跡調査を 2 年間行ない、通所サービス利用効果について、以下のことを明らかにすることができた。

1. 2 年間の利用継続率は 32.9% で、中断率は 3 ヶ月後までが最も大きかった。対象者の意思による通所拒否は利用開始 6 ヶ月以内に起こり、利用開始から 3 ヶ月の対応が重要であると考えられた。
2. 利用継続者の主観的幸福感 (PGC) 得点は、利用開始、3 ヶ月後より 2 年後が有意に上昇し ($p < 0.001$, $p < 0.001$)、3 要素別では「心理的動揺」「孤独感・不満足感」得点が 3 ヶ月後より有意に上昇した ($p < 0.001$, $p < 0.001$)。そのことから、利用者は 3 ヶ月以上の通所継続により孤独感・不満足感が解消され、主観的幸福感が向上すると推察された。
3. SOC 総合得点において、2 年後までの利用継続者は、入院により中断した者より有意に高く ($p < .00001$)、死亡した者より高かった ($p < .005$)。従って、通所サービス利用継続者は中断・死亡者などに比して、ストレス対処力や維持力が高かったと言える。
4. 利用継続者の BI 得点は、開始、3 ヶ月後、1 年後、2 年後で有意差は見られなかった。そのことから通所サービスの利用で ADL 低下予防の目的が達成できていると考えられた。
5. 男性より女性のほうが「利用者同士のお喋り ($p=0.000$)」、「外へ出かける活動 ($p=0.013$)」(3 ヶ月後)、「小集団で行う創作活動 ($p=0.014$)」(1 年後)に楽しみを感じていた。また、通所での食事を「楽しみ」とした利用者に通所サービスを今後も継続する意思が有意にあった ($P=0.028$)。
6. 1 年後における利用継続者の継続意思は、「ある」87.8%、「どちらともいえない」12.2%であったが、2 年後では「ある」が 96.4%であった。つまり、利用者は継続 1 年目で通所サービスに対して何らかの価値を見出して、2 年目では通所サービスを生活の一部として位置づけていることが推察された。